

# 「打ち言葉」における句点の役割

—日本人大学生のLINEメッセージを巡る一考察—

加 納 なおみ・佐々木 泰 子・楊 虹・船 戸 はるな

## 1. はじめに

スマートフォンとその関連サービスの普及に伴い、LINEなどメッセージング・アプリサービスの利用者が世界中で増加している。これらのアプリでは、「トーク」と呼ばれるテキストチャット機能とIP電話を利用した無料通話機能が提供され、スマートフォンのユーザー間ではメッセージ交換を中心に日常的に利用されるサービスとなっている。この新たなコミュニケーション手段の広がりには、コミュニケーションスタイルそのものにも様々な影響を与えている（佐々木, 2015a）<sup>1)</sup>。

文字チャットなどCMC（Computer-mediated Communication）における言語は、文字を媒介とするため「書き言葉」の要素を持ちながら、より「話し言葉」に近いとされ、「打ちことば」（田中, 2014）とも呼ばれている。「打ち言葉」は、書き言葉と話し言葉の境界線を曖昧にさせる一方、声を使わないためにパラ言語による情報が得られないという、話し言葉とは本質的に異なる側面を持つ（砂川, 2015）。しかし、その「ハンディ」を克服するために、周知のとおり、チャットアプリ上では、創造的な文字の組み合わせや使い方、絵文字やスタンプなど様々な記号の使用など規範的な正書法とは異なるテキスト生成が行われている。

新たなコミュニケーションツールとして急速に普及が進むLINEなどのチャットアプリに見られる、コミュニケーションスタイルや言語使用の特質は、すでに幾つかの先行研究（詳細は「先行研究」の章を参照）が指摘している。しかし、話し言葉と書き言葉の要素を合わせ持つ、「打ち言葉」としての日本語のルールについては、未だ解明されていない点が多いと言える。そこで、本稿では、チャットアプリの中でも、アジア圏を中心にユーザーが増加し、世界的な広がりを見せるLINEに注目し、LINEの使用率が極めて高い日本人大学生（佐々木・船戸, 2014）<sup>2)</sup>のLINE上のコミュニケーションを「打ち言葉」の観点からとらえ、句読法の「句点」を通じてその特徴を分析する。

## 2. 先行研究

LINEのテキスト言語を「打ち言葉」として捉えた際の特徴の一端を探るため、本章では、まず、チャットアプリなどCMCの場となるソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下SNS）の中でも、特に日本を中心に圧倒的な人気を誇るLINEのコミュニケーション上の特性について概観する。そのうえで、オンラインコミュニケーション上のテキスト言語に関する先行研究をまとめ、日本語の句読点の規範的使用について論じる。

## 2.1 LINEのコミュニケーション上の特性

西川・中村 (2015) は、LINEによるコミュニケーションの特性を①会話のスピード、②話題の並列性(輻輳)、③テキスト以外の表現の使い分け、④スタンプの多義性、⑤終了のしかた、という5つの観点について、日本人大学生からLINEのトークデータの提供を受け、インタビューを交えた調査を行っている。LINEの会話には非常に早い速度でやり取りされるものも多く、1分間に4～5件のやり取りが生じることもある。西川・中村 (2015) は、メッセージ交換の迅速化促進要因として、短文化や簡略化した言葉遣い、汎用性のあるスタンプ使用などに加え、「分かち書き」の機能の重要性を指摘している。会話のログをスクロールしてたどることができるチャット形式のLINEの画面では、文をまとめて送る必要はなく、細切れにして個別に送信しても、画面上では一つの文、あるいはつながった文章として理解することができる。このような表現手法は、文字チャットにおける「分かち書き」と呼ばれており、この分かち書きを通じて1回にまとめて送る内容を意図的に分割して送ることにより、相手が見やすいようレイアウトすることができ、また、全文をタイプしてから送信するよりも、相手の目に届く時間が早くなる。分かち書きで区切る部分は人それぞれだが、西川・中村 (2015) は、句読点を打つ部分や改行する部分で行われている場合が多いと述べている。また、テキスト交換によるコミュニケーションでは、感情表現のためにスタンプや顔文字・絵文字が多用されていることは広く知られているとおりが、西川・中村 (2015) は、微妙な感情表現を可能にする文字や記号の異なる意味付けについても実例と共に論じている。

## 2.2 オンラインコミュニケーション上のテキスト言語に関する先行研究

田中 (2014) は、PCメール・携帯メール・ブログ・ミニブログ・SNS上などのCMCにおいて、キーボードなどを「打つ」ことによって視覚化されたことばを「打ち言葉」と呼んでいる。「打ち言葉」は、「話すように打つ」メディアと評され、非対面・非同期というメディア特性を持つ。また、「自己装いや装飾性の高い要素」(田中, 2014, p. 37) が多く出現することも指摘されている。「話し言葉」的な要素が強いと言われる「打ち言葉」ではあるが、文字によってことばが可視化されることから、「書き言葉」的な要素も合わせ持つ(田中, 2014; Mar, 2000)。

カヴァナ (2012) は、CMCにおいて、文字や記号が、通常の使い方と異なる用法で使われ、パラ言語や非言語行動を表現するために用いられていることを、UMC (Unconventional means of communication) と称し、英語と日本語のオンラインコミュニケーションの特徴を比較対照した。UMCはピクトグラム(絵文字)、表語文字、表音文字の3つに分類されている。ピクトグラムは、いわゆる顔文字など、人物の表情のほか、身振りや心的態度などの非言語行動を表すものが多い。表語文字とは、表情、態度、感情などを文字で表し、日本語では「笑」「爆(笑)」「泣」「悲」など漢字が多用される。表音文字とは、ダッシュ(-)、ナカグロ(・)、波線(~)、促音(っ)などで、音の延伸、ポーズ、揺れ、強弱などを表すために使われる(松田, 2015)。カヴァナ (2012) は、UMCの機能を①ポジティブ・ボライトネス・ストラテジー、②ユーモア、③気楽なコミュニケーション、であると結論づけたうえで、UMCは言語学において新たな分野であるが、言語変化など多くの課題を含んだ進展著しい領域だと述べている。

このように、カヴァナ (2012) はUMCを巡って、創造的な言語使用という観点から日英両言語の比較を行っているが、英語においては、デジタルコミュニケーション上のテキスト言語に批判的な論調が少ない(Crystal, 2008)。英語ではテキストによるオンラインコミュニケーションに読み書き能力を投影する傾向が強いため、テキストメッセージで使用される特有の表現やスプリングなどに賛否両論がある。

メディアや教育者には、チャットアプリを多用する若者達のリテラシー、特にライティング能力の低下を憂慮する声も根強い。それは表記、文法など正書法に関する多くの領域に渡り、三人称単数現在形を示す動詞に付加される「s」の脱落や、文頭の大文字の小文字による代用など、長期的には英語の正書法や文法にテキスト言語が影響を与える（Herring, 2012）とか、英語そのものの変化を促すとの予測（Baron, 1984；Stein, 2006；Turner, 2009）もある。学校のレポートなど、正書法を規範とする領域へのテキスト言語による侵食や、若者のライティング力そのものの低下など、批判や懸念が根強く存在する（Turner, 2009）一方で、テキスト言語と正書法を混同する学生は少ない（Wheeler & Swords, 2006）、オンラインチャットで創造的な言語使用に積極的な学生はスベルテストでも得点が高い（Varnhagen et al., 2010）など、擁護派も存在する。

Varnhagen et al. (2010) は、オンラインコミュニケーションで使用される英語の特徴から、下記の12のカテゴリーを提示した。それらは、①仲間内で使われる用語、②略語、③結合語、④頭文字語、⑤あて字、⑥表音語、⑦小文字による大文字の代用、⑧縮約、⑨感情表現語、⑩感情表現のための略語、⑪大文字による強調、⑫感情表現のための句読点利用である。これら以外に他の先行研究で多く指摘される特徴として、句読点、特に句点（ピリオド）の省略がある（e.g. Lewin, 2008；Turner, 2009）。カヴァナ (2012) でも指摘されたとおり、略語やあて字、表音語、強調や、句読点を利用した感情表現、感情表現語、感情表現のための略語などは日本語のオンラインコミュニケーション上のテキスト言語にも多く見られ、句読点の脱落も日本語に共通する特徴である。

オンラインコミュニケーションにおける言語使用について佐々木 (2015b) は、LINEやWechatなどのチャットアプリ上における日本在住中国人留学生同士のやり取りを調査し、中国語ベースのトーク上で、中国語と日本語のコードスイッチングに加えて、中国語音の日本語による表記や、中国語による日本語の表記など、バイリンガルの留学生が統語や表記のルールに縛られずに、創造的に自らの言語資源を使っていることを明らかにした。ここでは、メッセージの送信者は、規範的な言語使用や言語間の境界線から解放されて、自らの言語資源を主体的に自由に使っている。ここで見られるような、オンラインコミュニケーションのマルチリンガル・マルチモーダル化は、世界的に注目を集める現象であり、近年多くの研究が進められている（Garcia & Wei, 2014; Jørgensen, 2008; Thorne, 2013；Warschauer et al., 2002）。

### 2.3 日本語の句読点の規範的使用

以上述べたとおり、オンラインコミュニケーションのテキスト言語における創造的で自由な言語使用に関する研究は世界的に増加傾向にあるが、教育現場に目を移すと、そこでは「正書法」の指導が不可欠である。文科省は昭和21年に句読法の規範をまとめた『くぎり符号の使ひ方（句読法）（案）』を示した。これは明治39年作成の文部省大臣官房調査課草案の句読法（案）を骨子とし、現代口語文に適用されるべく拡充され、「文科省で編集または作成する各種の教科書や文書などの国語の表記法を統一し、その基準を示すために」編纂された。句点と読点は主要な「くぎり符号」、疑問符（「？」）、感嘆符（「！」）は「補助的な符号」と位置付けられており、「発売以来半世紀を経ていますが、現在でも公用文、学校教育その他で参考にされています」と前書きには述べられている。「マル（。）」は主要な「くぎり符号」の中でもその一番目に掲げられ、①文の終止にうつ、②「」（カギ）の中でも文の終止にはうつ、と文の終止を明示するために不可欠であることが強調され、②には以下の例文が添えられている。

「どちらへ。」

「上野まで。」

これらは会話文の例であり、文法的には、「主語＋述語」から成る「文」でなく「句」に分類されるものだが、正書法では、「 」の中の会話文の場合でも終止を示すためには常に句点が必要なことが示されている。<sup>3)</sup>

このように文科省では正書法における句読法の規範を示しており、句点を句末・文末に打つという基本的なルールは広く共有されている。しかし、読点の打ち方は恣意性が高く、読点の打ち方については推奨されるルールはあっても絶対的なものではなく、国語教育のなかでも度々指導上の問題点が指摘されている(愛宕, 1979; 中川, 1980)。

### 3. 研究課題

本稿では、従来の「書き言葉」と「打ち言葉」の比較を通して「打ち言葉」の「創造的な記号システム」の一端を探るため、前述のとおり、文字を媒介とした文字チャットであるLINEのトークデータを「打ち言葉」ととらえる。日本語の正書法との比較をふまえ、「句読法」のなかでも、よりルールが明確な「句点」を中心に、「打ち言葉」における句点マーカー使用の特徴を、以下の研究課題を通じて探ることを目的とする。

**研究課題** 研究対象である日本人大学生が交換するLINEのメッセージにおいて、句点マーカーの使用にはどのような特徴・傾向があるか。

この研究課題を下記の3つに分けて検討、考察する。

- (1) 句点と読点はどのような頻度で出現するか。
- (2) 句点の出現にはどのような傾向があるか。
- (3) 句点・補助的記号・特殊文字の出現にはどのような傾向があるか。

### 4. 研究方法

本稿では、「打ち言葉」としてのLINEのコミュニケーションに固有の句読法について広く検討するため、前掲の文科省の資料を含め、先行研究を参考に、データ上に出現する記号類を下記の3つのカテゴリーに分類し、句末の出現数を数えた。出現数は、共同研究者のうち2名で一致するまで確認した。

① 「主たる記号」とみなされるもの：句点「。」と読点「、」

② 補助的記号

「？」「！」「～」「-」「・」：単独出現と複数出現に分ける

(ただし、「・」は「・・・」の形を単独出現の基本とする。「。」「、」が「・・・」の代用として複数出現した場合は②に含む。)

③ 特殊文字：上記以外の文字、記号。具体的には、

顔文字・絵文字

表語(「笑」「爆(笑)」「泣」「悲」など漢字のほか、「笑」の代用である「w」も含む。)に分ける。

前掲の研究課題(1)では、全データを対象に、句読点の出現箇所を特定、その数と出現率を、句点と読点に分けて捉えた。読点の出現には、個人の癖や好みも反映されやすいため、(2)では、句点のみに焦点を当て、出現の要因の分析を試みた。(3)では、データに現れる句読点以外の全ての記号や特殊文字の出現率を示したうえで、それらの関係性を検討した。

表1 データ提供者と通信相手の属性

A 男 19歳 大学1年 鹿児島県	a1	男	20	大学1年	東京都	F 女 22歳 大学3年 埼玉県	f1	女	21	社会人	埼玉県
	a2	男	20	大学2年	鹿児島県		f2	女	22	大学4年	埼玉県
	a3	女	19	大学1年	鹿児島県		G 女 20歳 大学2年 茨城県	g1	女	19	大学2年
B 女 22歳 大学4年 東京都	b1	男	22	大学4年	神奈川県	g2		女	19	大学2年	東京都
	b2	女	22	大学4年	フランス(留学中)	g3		女	19	専門学校2年	茨城県
	b3	女	22	大学4年	フィンランド(留学中)	H 女 20歳 大学3年 鹿児島県	h1	女	20	社会人	鹿児島県
C 男 18歳 大学1年 鹿児島県	c1	男	18	大学1年	鹿児島県		h2	女	21	大学3年	ベトナム(留学中)
	c2	男	18	大学1年	鹿児島県		h3	女	21	大学3年	熊本県
	c3	男	18	大学1年	鹿児島県	I 女 20歳 大学3年 東京都	i1	女	20	大学3年	千葉県
D 女 20歳 大学2年 東京都	d1	男	25	フリーター	東京都		i2	女	20	大学3年	東京都
	d2	女	20	大学3年	神奈川県		J 女 20歳 大学2年 東京都	j1	女	20	大学2年
	E 女 19歳 大学1年 鹿児島県	e1	女	19	大学1年	鹿児島県		j2	女	20	大学2年
e2		女	19	大学1年	鹿児島県	j3		女	20	大学2年	茨城県
e3		女	19	大学1年	鹿児島県						

データは、2016年6月～7月、日本語母語話者である大学生10人（東京の大学生6名、鹿児島の大学生4名）が、それぞれLINEで3人の友人と1対1で交わしたトーク履歴を収集した。<sup>4)</sup>10人中3人は友人2人ととのデータを提出したため、全部で27セットとなった。データ提供者の属性を、表1に示す。表中左の欄の大文字のアルファベット（A、B、C、D、E、F、G、H、I、J）はデータ提供者で、その下の地名は在住地を示している。右側の欄にはそれぞれの通信相手とその属性を合わせて提示する。

自然なトークを収集するため、データ収集依頼前に蓄積したデータのうち、提出したくない部分は削除したうえで、各セットにつき最低300メッセージを提出してもらった。絵文字・スタンプ等、テキストファイルに反映されない画像データについてはスクリーンショットでの提出とした。1送信を1メッセージとしたため、1送信の長さは一定ではないが、分析したデータの量は、1人につき900メッセージとなり、（うち2セット提出となった3人は1人につき計600メッセージ）、10人分で計8100メッセージを分析対象とした。これには、提出した本人だけでなく、相手が送信したデータも含み、300メッセージを超過する場合は300メッセージまでを対象として冒頭から分析した。これら全てについて、前述のとおり、句読点、特殊文字、記号等の出現数を特定し、それぞれの出現率を計算した。そのうえで、句点の出現及び非使用の傾向を分析し、さらに、出現頻度の高いデータと低いデータを中心に、他の記号や特殊文字の使用を含めて全体的な傾向を考察した。

## 5. 結果

### 5.1 研究課題(1) 句点と読点はどのような頻度で出現するか

分析対象としたメッセージ上に出現した句読点の出現数と出現率を表2に示す。<sup>5)</sup>

表2データ欄のアルファベットは提供者を表し、その横の数字は、表1で示した通信相手に割り当てた数字と共通である。つまり、A1はデータ提供者Aが、通信相手a1と交換したメッセージのセットを意

表 2 句読点の出現数と出現率

データ	句点数	読点数	句数	句点出現率	読点出現率	データ	句点数	読点数	句数	句点出現率	読点出現率
A1	54	70	305	18%	23%	E3	11	49	390	4%	16%
A2	54	111	354	15%	31%	F2	5	44	375	1%	12%
A3	38	55	380	10%	14%	G1	0	36	318	0%	9%
B1	4	13	306	1%	4%	G2	0	57	320	0%	19%
B2	7	29	329	2%	9%	G3	0	3	321	0%	1%
B3	11	26	316	3%	8%	H1	43	52	278	14%	16%
C1	0	6	285	0%	2%	H2	2	39	260	1%	14%
C2	0	4	284	0%	1%	H3	4	5	277	1%	2%
C3	0	2	280	0%	1%	I1	2	36	338	1%	13%
D1	8	66	252	3%	26%	I2	0	5	434	0%	2%
D2	125	210	636	20%	33%	J1	0	19	275	0%	3%
E1	4	29	303	1%	10%	J2	2	14	263	1%	5%
E2	11	24	287	4%	8%	J3	11	26	273	4%	9%
						総計	396	1030	8439	5%	15%

味している。「句点数」「読点数」は各データ中に出現した句点と読点それぞれの総数を表す。話し言葉の特徴を持つLINEの会話データには、文法的に不完全な形（主語、述語が脱落したもの）が多いため、「文」ではなく、「句」を分析の単位とした。句数はそのデータ内のすべての句（文も含む）の数を、出現率は句数に対して句点、読点がそれぞれ出現した割合を示している。

表2で示されたとおり、全体を見ると、読点出現率15%に対し、句点出現率は5%と、句点の出現が少ないことが目立つ。これは、正書法では句点が必要な箇所句点に打たずに送信されるメッセージが多いことが一因である。長いメッセージは区切ったほうが送信時間が早くなる（西川・中村, 2015）というLINEのテクノロジー上の影響で、「分かち書き」が迅速な送信を可能にしており、意味上は続いているメッセージが別々のタイミングで送信されることも多いため、句末あるいは文末であることを句点によって明示的に示す必要がないのである。また、処理スピードを上げるために、句点の存在が明らかな位置にはあえて打たず、少しでも早くメッセージを送信しているとも考えられる。

表3は、句点が全体的に少ないCのデータの一例である。このデータ中では、300行の会話に読点が2回出現するのみで句点の出現は皆無である。Cは相手に関わらず句読点の使用が全体的に少なく、句点の出現は3セットを通じゼロだった。読点の使用にはばらつきがあるが、句点に関しては、男子学生同士であるCのデータだけでなく、女子学生同士のGも出現率は3セットを通じゼロであり、同じく女子学生同士のE、I、Jのデータも句点出現率は全て5%以下であった。

## 5.2 研究課題(2) 句点の出現にはどのような傾向があるか

今回のLINEのトークデータ上では句読点のうち、特に句点の出現率が全体でも5%と低いこと、および句点の出現率が低いデータにおいては、通信相手に関わらず、一貫して低い傾向が認められた。ここで、句点の出現率に大きな差があるDとHのデータについて検討する。まず、D1が3%、D2が20%と開きが

表3 トーク例：C3

17:48	c3	もう食堂おるの？
17:49	C	図書館
17:49	c3	りよ
17:56	C	着いたら連絡して
17:56	c3	今ビッグのあたり
17:56	C	家にはかえった
17:59	c3	今食堂着いたから待ってる
18:00	C	りよーかいなり

あるDのデータに着目する。D2では、300メッセージにおける句数の合計が636と突出して多い。これは、Dだけでなく、通信相手のd2の1送信中のメッセージが複数の句、あるいは文から成っているためである。これは、句点を打つことができる句末の数が多いことを意味し、d2は実際に句末に句点を打つことが多かったため、結果的にD2における句点の出現率を押し上げた。以下は、D2中の1送信例である。改行位置は原文のまま示す。

表4 メッセージ例: d2

12:28	d2	あー。不安だよお。口から心臓出そう。← ねえ。そして、遊びたいよお。 XたちのTL見て思ったけど、 スパランド行きたいわ。(笑)
-------	----	---

D2ではこのあと互いの進路に関する相談など、複雑なトピックが続くため、前述のとおり、1送信が複数の句や文から成るトークが多く、d2が句点を多用する傾向が続く。しかし、Dのもう一つのデータであるD1では句数は他のデータと比較しても特に多くはなく、句点の出現率も3%と低めであった。ここから、句点の出現率には、トピックと、通信相手の句点使用スタイルによる影響がうかがえる。

次に、Hのデータを取り上げる。H1では句点の出現率が14%でありながら、H2、H3では1%となっている。この違いは、通信相手が要因である。H1の句点は全てHの通信相手であるh1のトークに付随して出現しているが、日本人の句点使用はない。H自身が句点を用いないのはH2、H3にも共通しており、通信相手も同様に句点を打たなかったことから、これらのデータにおける句点の出現率は低くなった。つまりデータ提供者H自身の句点使用には3つのセットを通じて同様の傾向が見られる。

### 5.3 研究課題(3) 句点・補助的記号・特殊文字の出現にはどのような傾向があるか

今回のデータ全体における句点の出現率を他の記号、特殊文字との関係において考察するため、全データのメッセージにおいて、「補助的記号」「その他」に分類した特殊文字等の出現総数を合わせて掲げる。

表5の各枠内の数値は、各データにおける全記号類の総数に占める個々の出現率（単位は％）を示している。この結果に基づき、本節では、句点の出現・非出現と、「補助的記号」、なかでも感嘆符「！」・疑問符「？」、及び「その他」に分類される絵文字等特殊文字の出現との関係について検討する。

表5 句読点・補助的記号・特殊文字等の出現

データ	句点	読点	補助的記号				複数出現	特殊文字		無標	総数
			単独出現			表語		顔文字 絵文字			
			？	！	その他						
A1	13.3	17.2	7.4	20.6	8.4	2	18.2	8.8	4.2	100%(N=407)	
A2	11.9	24.4	12.6	1.1	9.9	0.0	3.3	2.4	34.4	100%(N=454)	
A3	11.2	16.3	12.7	4.7	4.4	2.1	2.4	0.9	45.3	100%(N=338)	
B1	1.1	3.7	13.0	0.6	4.2	1.4	3.7	0.0	72.4	100%(N=355)	
B2	1.9	8.0	8.3	7.5	17.7	6.9	2.2	3.6	43.9	100%(N=362)	
B3	2.8	6.5	3.3	0.8	25.4	6.5	14.9	2.5	37.3	100%(N=397)	
C1	0.0	2.0	13.6	6.4	10.8	3.1	25.1	0.3	38.6	100%(N=295)	
C2	0.0	1.4	14.1	3.2	18.0	0.4	12.0	2.1	48.8	100%(N=283)	
C3	0.0	0.7	13.4	0.7	9.2	0.3	19.5	0.3	55.8	100%(N=292)	
D1	2.5	20.6	5.9	13.7	0.0	5.9	36.8	4.4	10.3	100%(N=321)	
D2	15.2	25.5	4.7	10.6	4.5	5.2	20.8	12.7	0.8	100%(N=824)	
E1	1.2	8.5	10.0	18.8	7.6	7.9	28.2	4.7	12.9	100%(N=340)	
E2	3.1	6.7	5.6	3.9	3.6	4.2	61.7	10.0	1.4	100%(N=360)	
E3	2.1	9.3	4.0	3.8	3.6	6.2	46.7	24.2	0.2	100%(N=529)	
F2	1.1	9.8	3.6	16.1	3.3	16.1	15.6	5.6	28.8	100%(N=448)	
G1	0.0	10.5	7.9	1.2	6.4	6.7	20.4	9.3	37.6	100%(N=343)	
G2	0.0	14.5	9.4	25.9	8.6	16.2	4.6	10.7	10.2	100%(N=394)	
G3	0.0	1.0	4.7	5.1	2.0	23.4	14.6	14.2	34.9	100%(N=295)	
H1	13.5	16.3	11.0	12.9	6.9	9.7	9.4	7.2	13.2	100%(N=319)	
H2	0.6	12.7	13.6	17.9	1.3	7.8	15.3	13.3	17.5	100%(N=308)	
H3	1.2	1.6	19.6	24.9	2.5	5.0	27.7	2.8	14.6	100%(N=321)	
I1	0.5	8.2	6.4	10.7	5.0	12.0	0.7	27.0	29.5	100%(N=440)	
I2	0.0	0.8	7.8	11.7	9.1	9.9	38.5	5.0	17.3	100%(N=618)	
J1	0.0	5.8	6.1	7.9	13.1	5.2	13.7	1.5	46.6	100%(N=328)	
J2	0.5	3.8	8.0	7.2	4.3	6.2	24.4	15.0	30.6	100%(N=373)	
J3	3.2	7.6	3.8	0.9	6.4	0.0	11.7	0.0	66.4	100%(N=342)	
総計	3.9	10.2	8.4	9.3	7.4	6.7	19.6	8.0	26.5	100%(N=10086)	



## 5.3.1 記号全般の出現率が高い場合

表5を概観すると、句読点の出現率と他の記号の出現の関係にはいくつかのパターンが見出せる。まず、句読点の出現率が高いA1やD2では、顔文字や記号の出現率も高く、句末に何も無い「無標」は少ない。例えば、A1のデータでは下記に示されるとおり、ほとんどの句末に特殊文字や記号が付されている。

表6 トーク例:A1

21:57	A	まあ、怪しまれないように気を付けるかなw
21:59	a1	怪しまれねーって！(笑)
21:59	A	分からんぞ～？w
22:02	a1	そりゃねーべ！
22:02	A	www
22:03	a1	ま、大丈夫さ！(笑)
22:03	A	まあ、行くかどうかは明日の朝の気分次第だな。
22:03	a1	まあ、無理はすんなよー！
22:04	A	あいよー(´^`)

## 5.3.2 句点の出現率は低い但他的記号の出現率が高い場合

記号類全体の出現に対する句点の出現率は、表5においても3.9%と、最も低いことがあらためて確認できる。これに対し、「？」「！」など、文科省の正書法手引きでは「補助的」な位置付けの記号と、正書法の句読記号には含まれない特殊文字の出現率の高さが目を引く。補助的記号は単独・複数出現の合計が31.8%、特殊文字は合計27.6%で、これら両カテゴリーを合わせると6割近くにのぼり、規範的な句読法で中心的な地位を占める句点の出現をはるかにしのいでいる。そこで、以下では、句点の割合が少ない一方で、他の記号類の出現が目立つデータに注目する。

まず、全記号中、句点の出現率がゼロでありながら、補助的記号の単独出現が43.9%、複数出現も合わせると6割を超えるG2の例を掲げる。G2は全データ中で最も補助的記号の出現率が高く、中でも感嘆符「！」の単独使用の出現率は25.9%を示している。表7に見られるとおり、ほぼ全てのメッセージの句末に「！」か「？」が付されており、「！」の複数出現も2回ある。表5の25.9%は単独使用のみの出現率なので、複数使用も合わせるとその率はさらに上がることになる。その一方で、すでに述べたとおり句点の出現はGの全データを通じてゼロである。

次に、特殊文字の出現率が合計70%を超えるE3に着目する。このデータにおける句点の出現率は2.1%となっている。E3では、データ提供者Eも、その通信相手のe3も共に句点はほとんど使っていないが、絵文字・顔文字、表語等、特殊文字の出現率では70.9%と、表5のデータ中2番目に高い数値を示している。特殊文字の出現率が最も高いものは、同じくEが提供したE2で、合計71.7%とE3をわずかに上回る。一方で、E3は句点出現率がE2より1%低くなっている。E3の補助的記号の出現率は17.5%と、全体のなかでは高いほうではないが、特殊文字と補助的記号を合わせると9割近くとなり、句末に何も付いていない無標は0.2%と全データ中最も少ない。

表7 トーク例：G2

8:43	G	ありがとう！！
8:44	G	いちおう、XXさんXXXさんXXXXに、写真のせていいか聞いてもらえると助かる！！ YYの顔はわたしが隠しておくから大丈夫(^o^)
9:30	g2	そうだよね！聞いてみます！
10:01	G	[スタンプ]
10:59	g2	おけーもらったよ！
11:15	G	ありがとー！
16:43	g2	ついてるー？
16:43	G	あと2分くらい！
16:43	G	何口？
16:44	g2	中央改札ってとこにいるよ！

表8 トーク例：E3

8:58	e3	市電でキックボクシングゆーてたのか！笑笑
8:59	e3	市電はいろいろおきるね～♡
9:00	e3	周りにはもう気にしないで全力でしゃべろう♡
9:59	E	一回で人生が終わるよ(´▽´)
9:59	E	怖いね～～笑 盛者必衰を実感した。笑
9:59	E	これは仲良くなってるって思っ方がいいよね??笑

## 6. 結果のまとめ及び考察

前章の議論を元に、以下では研究課題に沿って結果のまとめを行い、総合的に今回のデータの「打ち言葉」としての句点マーカー出現の特徴・傾向について考察する。

### 6.1 研究課題(1) 句点と読点はどうのような頻度で出現するか

読みやすくするために正書法では読点を打つのが一般的な箇所でも、LINEでは送信の度に句の区切りが明示されるため、読点がないだけでなく、句点なしで送信されるメッセージも珍しくない。本調査でも全句数に対し、句点の出現率は5%に過ぎなかった(表2)。今回対象としたトークデータでは、「書き言葉」なら打つのが「規範」である箇所に句点が存在しないという、句点の潜在化・不可視化が多く観察された。また、今回の調査では句点の出現・非出現には男女差は特に見せなかった。

## 6.2 研究課題(2) 句点の出現にはどのような傾向があるか

ここでは、データ提供者を中心に考察する。全てのデータにおいて句点が10%を超える高い出現率を示したのは、Aだけであった。Aは通信相手に関わらず句点の使用に積極的だったため、全体的に出現率が高まった。A以外で高い出現率を示したのは、DとHのデータの一部（D2、H1）だが、これらは通信相手の句点使用に起因していた。H1における句点は全て通信相手の使用によるものだった。D2では、トピックの複雑さから1送信が複数の句から成るものが多かったうえ、通信相手のd2が句点を多く使用していた。しかしD1では通信相手が句点をほとんど使わず、D自身の消極的な句点使用の傾向には変化がなかったために、D1の句点出現率は3%と、むしろ全体の平均値より低い結果となった。出現率が低いデータでは全体的に通信者双方の句点使用が少ない。以上より、句点の出現の多寡には個別の要因があること、さらに、個人の句点使用には一定の傾向があることが観察された。

## 6.3 研究課題(3) 句点・補助的記号・特殊文字の出現にはどのような傾向があるか

今回のデータからは、いくつかのパターンが浮かぶ。まず、A1やD2など、句点だけでなく、他の記号の出現率も高い場合である。これらでは無標が少ない。このことは、ほとんどの句末に句点を含めた何らかの記号が付されていることを意味している。反対に、句点がほとんど出現しないJ3では、絵文字や補助的記号なども同様に出現しないため、無標が6割を超えた。

しかし、句点が無いことが必ずしも句末の無標に直結するわけではない。G2やE3で示されたように、句点そのものの出現率が低くとも、ほとんどの句末に何らかの記号や特殊文字を付ける場合もある。全データを通じて、「補助的記号」や「その他」の特殊文字等の出現率の方が句点のそれよりはるかに高かったことは、表5で示されたとおりである。本調査では、句点が不可視化される一方で、規範的な正書法では補助的な位置付けの「?」「!」が句末マーカ―として存在感を増していることが示された。G2では、規範的な句読法では中心的な地位にある句点と補助的記号である感嘆符の立場が逆転しており、打ち言葉における補助的記号の優位性を端的に示す一例となっている。

さらに、句点がなくとも、特殊文字や絵文字等、多様な記号が句末に多く出現するパターンも確認された。E3では句点の出現は2%程度でありながら、それ以外の記号や特殊文字がほぼ全ての句末についている。これは、田中(2014)が打ち言葉の特性として挙げた、「装飾性の高い」メッセージの一例だと言える。

以上述べたとおり、句点の出現率が低い一方で、他の記号類の出現率が高いデータからは、「打ち言葉」において「句点」の機能を果たす要素が多様化している実態が浮かび上がる。ここでは、記号システムの使用に関する基本姿勢から、使う場合はその頻度、要素の選択と組み合わせ等、無限とも言える選択肢が生まれていると言える。本調査の対象者からは、これら記号システムが擁するレパートリーを自在に選択している姿がうかがえる。LINEでは、「打ち言葉」における句点が不可視化される一方、通信者は、句末に特別な思いを込めたり、意味付けをしたい場合、「。」以外の特殊文字や記号など、様々な句末マーカ―を加えている。ここから、LINEにおける日本語のメッセージでは句末マーカ―のマルチモーダル化が進んでいることが示唆されている。

今回の調査からは、LINEをプラットフォームとするコミュニケーションスタイルの多様化がうかがわれる。通常の文字以外、何も打たないシンプルなコミュニケーションを好む者がいる一方で、多様な特殊文字や記号の使用により、手間や時間をかけてもメッセージに様々な意味や思いを込めることを選択する通信者の存在は明らかである。テクノロジーは、打ち言葉を巡って「速さ」と「豊かな個性の表現」の共

存をめざす人々の欲求に応えるべく進化を続けているが、それを使う人間の創造性が生み出す新たな言語使用の一端が、本調査の結果から示唆されたと考えられる。

#### 6.4 今後の課題

今後は、「打ち言葉」における句末マーカ―のマルチモーダル化について、さらに対象者を広げて多面的に考察を深めていきたい。そしてそれが、言語そのもののあり方や、現代の我々のコミュニケーションスタイルの変化とどう相互作用を与えあっているか、他の言語との比較なども通して研究を進めていきたいと考えている。また、スタンプや写真のマルチモダリティについての検討なども極めて重要な課題である。さらに、創造的な表記や言語使用と、リテラシー能力全般との相関関係など、多面的な角度からの調査も望まれる。

### 謝辞

本論文を執筆するにあたり調査に協力してくださった皆様、多くの示唆に富む有益なコメントをくださった査読委員、編集委員の先生方、並びにデータの解析・改稿に貴重なご助言を賜った倉田芳弥さんに心より感謝申し上げます。

#### 註

- 1) 佐々木 (2015a) によれば、インターネットやスマートフォンの普及により急速に増加したLINEなどソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の利用者はメッセージ交換や、関心事を共有するユーザーグループへの参加を通じ、オンラインコミュニティを形成し、人間関係を質・量の両面から強化している。また、利用者は、交流・交歓の「場」となる「プラットフォーム」を意識的に選択し、使い分けが可能のため、従来型のメディアである電話やEメールに加え、より多様な選択肢を持ち、時間的・空間的な制約に縛られずに人間関係の維持・強化がしやすくなっている。
- 2) 佐々木・船戸 (2014) は日本、中国、タイ、台湾、韓国の大学生のSNSの使用状況を調査し、これらの国々でもSNSは大学生の間で高い使用率を示すとともに、日本ではTwitter と並んでLINEが圧倒的な人気を集めていると報告している。
- 3) 「 」の中でも全文の終末に句点を打つという文科省の方針と、出版界の慣習は異なり、終わり括弧の直前の文や句に句点がない場合もある。例1では、句末、文末全てに句点が打たれているが、例2では、終わり括弧の直前の句末、文末には句点がない。

例1：「ねえ、房子、今ね、房子の財布をのぞいて、おじいさんに叱られたところ。

悪かったら、ゴメンなさい。」(川端, 1995, p. 28)

例2：「レモンを飲めば、いくらかはすつきりするわよ。台所に買ってきてあるから」(大江, 2001, p. 92)

- 4) データ収集に先立ち、大学内の倫理審査委員会に申請を行い、必要な手続きを完了した。対象者とそのデータ送信相手全員から同意を得た。
- 5) F1ではD2に次ぐ高い句点の出現率を示したが、これはゲームのために同一の定型文を何度も送信し合った結果であり、通常のチャットのやりとりとは異なるため、分析対象から除外した。

付記

本研究は、科学研究費基盤研究(C)「LINEをプラットフォームとした多言語多文化社会におけるネットワーク構築」(平成28年度～30年度 課題番号16K02803研究代表者 佐々木泰子)による研究の一部である。

参考文献

- 愛宕八郎康隆 (1979) 「国語教育における句読法の諸問題」『長崎大学教育学部教育科学研究報告』26, 1-10.
- 大江健三郎 (2001) 『個人的な体験』新潮社
- カヴァナ・バリー(2012)「英語、日本語におけるオンライン・コミュニケーションの対照分析～UMCを中心に～」『青森保健大雑誌』13, 13-22.
- 川端康成 (1995) 『山の音』新潮社
- 佐々木泰子 (2015a) 「SNSの利用実態から見た留学生のコミュニケーション・プラットフォーム」『お茶の水女子大学人文科学研究』11, 15-25.
- 佐々木泰子 (2015b) 「中国人留学生の無料通話アプリケーションに見られる日本語—スマートフォンでのWeChatとLINEに焦点をあてて—」『社会言語学会第35回大会発表論文集』148-151.
- 佐々木泰子・船戸はるな (2014) 「アジア五か国大学生の非対面コミュニケーションに関する一考察」『シドニー日本語教育国際研究大会2014年』〈<https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program?id=689&t=ppid>〉
- 砂川有里子 (2015) 「聞き手と読み手の対話」『第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 報告・発表論文集』8-11.
- 田中ゆかり (2014) 「ヴァーチャル方言の3用法『打ちことば』を例として」石黒圭・橋本行洋 (編)『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房, 37-55.
- 中川健次郎 (1980) 「句読法の指導：小・中・高校を通して」『国語教育研究』26 下号, 73-83
- 西川勇佑・中村雅子 (2015) 「LINEコミュニケーションの特性の分析」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』4(16), 47-57.
- 松田真希子 (2015) 「パラ言語としての文字音声コミュニケーション」日本語音声コミュニケーション教育研究会予稿集『日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから』50-54.
- Baron, N. S. (1984). Computer mediated communication as a force in language change. *Visible Language* 18, 118-141.
- Crystal, D. (2008). *Txtng: The gr8 db8*. Oxford University Press.
- García, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Basingstoke, UK: Palgrave Pivot.
- Herring, S. (2012). Grammar and electronic communication. In C. Chapelle (Ed.) *Encyclopedia of applied linguistics*. Wiley-Blackwell.
- Jørgensen, J. N. (2008). Polylingual language around and among children and adolescents. *International Journal of Multilingualism*, 5, 161-176.
- Lewin, T. (2008). Informal style of text messages is showing up in schoolwork, study finds. *New York Times*. 25 April, 2008. 〈<http://www.nytimes.com/2008/04/25/education/25writing.html?ref=education>〉.
- Mar, Juliet. (2000). Online on time: The language of internet relay chat. *Cyberlines: Languages and cultures of the Internet*. 151-174.
- Stein, D. (2006). Language and internet. Email, Internet, chatroom talk: Pragmatics. In E. K. Brown (Ed.), *Encyclopedia of language & linguistics*, 2<sup>nd</sup> ed. (pp. 116-124). Oxford, UK: Elsevier.
- Thorne, S. L. (2013). Language learning, ecological validity, and innovation under conditions of super-

- diversity. *Ballearra Journal of Teaching & Learning Language & Literature*, 6(2), 1-27.
- Turner, K. H. (2009) . Flipping the Switch: Code-switching from text speak to standard *English*. *English Journal*, 98(5), 60-65.
- Varnhagen, C. K., McFall, G. P., Pugh, N., Routledge, L., Sumida-MacDonald, H., & Kwong, T. E. (2010). lol: new language and spelling in instant messaging. *Reading and Writing*, 23(6), 719-733
- Warschauer, M., 0Said, G.R.E., & Zohry, A. G. (2002). Language choice online: Globalization and identity in Egypt. *Journal of Computer-mediated Communication*, 7 (4).
- Wheeler, R. S., & Swords, R. (2006). *Code-switching: Teaching standard English in urban classroom*. Urbana: NCTE.